

フィールドトリップに向けた成果共有による効果的な文献研究の提案
—天草・島原・長崎を対象として—

香川貴志

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要 第8号

令和8年(2026)3月

フィールドトリップに向けた成果共有による効果的な文献研究の提案

—天草・島原・長崎を対象として—

香川 貴志

(京都教育大学)

Proposal for Effective Literature Study with Sharing Results for a Field Trip: A Case Study of Amakusa, Shimabara and Nagasaki

Takashi KAGAWA

2025年9月30日受理

抄録：大学や大学院での研究では、既往研究の系譜をたどることで当該研究の研究目的を明瞭にし、そこからオリジナルの研究が展開するのが一般的な手順である。それが実地見学を伴うフィールドトリップ（エクスカージョン）であれば、訪問予定地域を扱った様々な角度からの研究成果に可能な限り多く触れておくことが望ましい。そこで本稿では、2025年度前期集中科目として実施した学部開講科目「地理学研究」および現地授業を共通で行う大学院開講科目「社会科教育実践演習・地理」の事前学習での実践例を紹介し、その教育効果を検証する。この実践では文献精読が中心的な授業内容を構成している。文献精読のエッセンスを要旨で共有すれば、限られた時間内に通常の数倍の文献要旨と接することが可能となり、訪問地域に対する質の高い予備知識を身につけたうえで現地に立つことができる。一連の学習を経た受講生の感想や改善意見からは、作業には難しさや辛さを感じた者が多かった一方、作業を通じて得た知識に対する満足度は総じて高かった。授業方法についての改善意見は多くなく、受講生各自の取組み方への反省が卓越した。

キーワード：フィールドトリップ、文献精読、文献要旨集、成果共有、レポート課題

I. はじめに—地域研究において文献研究がもつ意味、および本研究の目的—

私たちが大学や大学院などの高等教育機関で研究活動を行う場合、研究目的を明記することが求められる。この目的は、単に「〇〇に興味関心があるので…」あるいは「以前から長らく疑問を感じていた〇〇の実態解明のため…」という漠然としたものであってはならない。こうした記述はレポート、雑記やエッセイ（数頁しかなく参考文献を伴わない書誌分類上のMISC）では許されても、ひとたび論文となれば体裁として不十分である。しかし、長年にわたって卒業論文の指導をしていると、当初は「多くの文献を読まなくても論文は何とか書ける」と勘違いしている学部学生が散見される。もちろん指導過程で軌道修正に努めるが、次の段階で頻繁に遭遇するのが参考文献のなかに学術論文が全く含まれておらず、参考にした研究先例のすべてが単行本であるという卒業論文素案（中間報告）である。

さすがに大学院学生ともなれば相応の学術論文を参考文献に含めている者が大多数であるものの、参考文献のすべてが単行本というケースは、大学院学生であっても稀にある。原則的に単行本は、研究成果の集成や再構成を図ったものなので、やはりその原典（初出）に触れておく作業を怠るべきではない。

上述したような学生たちの失敗は、おそらく学術論文を読んだ経験が乏しいか無いということに起因すると筆者は考えている。筆者が運営している地理学ゼミでは、3回生時点の発表で関心分野に関わる論文紹介を課しているが、初めての発表では啓蒙誌の短報類の紹介も認めている。なぜなら、3回生の段階で対象を学術論文に限定してしまうと消化不良をきたすことが懸念されるからである。論文は内容を理解できなければ読む価値が低い。

ひるがえって本稿で実践例として取り上げる授業「地理学研究」は、受講可能な学年が2回生以上である。つまり本格的な学術論文を読むには苦痛を感じる者も少なくないと推察される。そこで、シラバスでは事前学習で文献精読をすることを明記しており、このことを承知のうえ登録してもらうことにしている。覚悟を決めて受講

登録した学生たちは、2回生であっても上回生と同様の文献研究に励むことになる。文献研究には相応の時間を費やさないとけない。しかし、文献を読むにはどの程度の時間と労力を要するのかを学生生活の早期から体験的に知っておくことは大きな意味がある。

本稿で紹介する文献研究は、ここまで述べたような研究活動の流儀やマナーを会得しておくことに加え、授業としての「地理学研究」や「社会科教育実践演習-地理-」で訪問する地域の実情や課題を事前に知っておくという目標がある。ただ、それが「授業の華」ともいえる現地授業ほどダイナミックではなく、どちらかといえば地味で時間を要する作業なので、このような授業実践の成果物を筆者は「地理学研究」（奇数年開講）と「地理学特講」（偶数年開講）において、ここ数年まとめてきた。そこでは、他者が同じ地域を訪問する授業実践や地域研究を行う際に活用できる参考資料の提供が大きな目的になっている。対して本研究は、同様の手続きによる成果物の集成を香川（2026a, 2026b）に、授業実践の全般の備忘録を香川（2026c）に委ね、文献研究の成果共有のための方法の開示、および成果共有による教育効果の検証を目的としている。

校種を問わず授業における成果や情報の共有は数多く示されてきた。たとえば、下村・須曾野（2007）は学習成果の共有に加えて成果を相互評価することが学習内容の定着に寄与することを指摘した。また、小学校の授業においても成果共有が授業改善に向けて有用であることが福島・下村（2016）や渡辺（2019）によって紹介された。さらに、学習成果を共有することは大学の授業でも向学心の高揚に有効であることを丹生ほか4名（2024）や松名ほか4名（2024）が実証した。こうした成果共有は、GIGA スクール構想の定着によって初等・中等教育の現場において従前に比べて格段に図りやすくなった。高等教育では学びに関する一層の深化があり、演習（ゼミ）などで議論を重ねながら学びの成果共有を図る土壌が整っていたが、それ以外の授業では何らかの工夫をしないと学習成果の共有は決して簡単なことではない。本研究に示す情報共有の方法は、演習ではない授業において様々な地域調査を共同作業で行う場合、相応に有効であると期待できる。

Ⅱ. 地域情報共有のための『文献要旨集』が完成するまでのプロセス

本章では、『文献要旨集』が完成に至るまでのプロセスを示して、地域情報の共有に向けた基盤を詳らかにする。手順に関する事実記載が中心をなしており、個々の場面でその狙いや目標を添えている。

1. 訪問予定地（現地授業を実践する地域）の選定をめぐって

現地授業を実践するための訪問予定地は、これをシラバスに明記しておく必要があるため、遅くとも授業実践の前年の晩秋には決めておく必要がある。現地授業の実施日程についても同様である。本学の場合、8月下旬には教育実習（学部3回生の主免許実習、大学院M1学生の教職専門実習Ⅰ）が組まれているため、前期の成績報告期限との関係を考えて、日程の確定は訪問予定地の選定よりも制約が大きい。

(1) 本授業科目における事前学習と現地授業について

本研究を実施した学部授業科目の「地理学研究」は、1年毎に交互実施される「地理学特講」とともに、2泊3日の行程での現地授業がコアになっている。コマ数の割合でみると、事前学習：現地授業=1:2となっており、事前学習が5コマ（10時間）、現地授業が10コマ（20時間）である。この枠内で訪問予定地を模索すると、最終的に今回の訪問予定地となった天草・島原・長崎のような遠方の場合、現地集合を午後にする、または現地での前泊を前提とした旅程を設計する必要がある。他方、現地解散については、本章の冒頭に述べた教育実習との関係で、当日中に帰洛できる時間に現地解散としている。

費用面からみれば、比較的近い場所での実施が望ましいと思われるが、京都からの距離の遠近と受講生の多寡には深い関係が無いように見える。本学は単科大学ではあるものの、京都という地の利があるためか全国各地から入学者を集めている。過去実施分の最近5年間の具体例を示そう。たとえば、現地授業実施地域と受講学生数（学部学生+大学院学生）を列記すると、2020年は中山道（妻籠宿・奈良井宿・木曾平沢）を11名、2021年は出雲・石見を19名、2022年は丹後半島・舞鶴を31名、2023年は三陸被災地（石巻～宮古市田老・田野畑村北山崎）を21名、2024年は小豆島を14名で訪問した。

以上のうち2020～2022年はコロナ禍の影響により、宿泊先はすべてシングルルーム対応でビジネスホテルに

投宿し、2023年によく相部屋が可能になった。近年の学部学生は、旅先での語らいが楽しいのかシングルルームよりも数名での相部屋を好む傾向がある。準備する側としては、直前キャンセル等により受講者数が変動することもあるため、1部屋あたりの収容人数で調整を図りやすい相部屋の方が対応は容易である。

(2) 訪問予定地の決定と旅程のアウトラインについて

筆者が本学に着任してから35年目にあたる今年は、定年を前にした最後の授業となるため、学生たちを連れて是非とも再訪したかった長崎を組み入れて、近年の社会科において取り上げられる機会が多い世界遺産と防災・減災を加え、天草・島原・長崎とした。シラバス執筆前に地域選定を終えたのは言うまでもない。ただ、学生たちから「香川先生が居られるうちに是非とも参加したい」との有難い声を多く聞いていたので、人数が多くなり過ぎた場合の対応を考慮しておく必要があった。公共交通が決して便利ではない天草地域では、路線バスが小型車両であることを予備調査(2025年2月実施)で確認済みだったため、当初から借上げ大型バスの使用を前提として、標準的な大型バスの補助席を使わない正座定員45名をもとに受講定員枠を45名(学部と大学院の合計人数)とした。

しかし、受講登録が始まると、すぐに受講定員を僅かながら超過する事態が生じた。その状態が落ち着いたため、希望者を無下に断るのも忍びなく全員の受講を認めた。大学院修了生である現職の男性中学校教員1名と本授業科目の担当者である筆者の他、学部学生40名と大学院学生5名からなる、1人で引率するには少し大きな集団ができあがった。また、今回の受講希望者は受講登録後にキャンセルをした者がおらず、この点では授業は運営で大きな支障をきたすことはなかった。

長崎市を除く訪問地域の公共交通機関網が総じて脆弱であることから、天草市本渡で現地集合した後は次のような行程とした。この旅程では、地名の間の()は利用交通機関を指している。【第1日目:8月20日】7:35集合:本渡バスセンター(借上げバス)河浦・崎津教会(借上げバス)苓北町富岡城址でトンボロと砂嘴を観察(借上げバス)鬼池港(フェリー)口之津港(借上げバス)原城址(借上げバス)雲仙岳災害記念館「がまだすドーム」(借上げバス)長崎市内宿舎、【第2日目:8月21日】長崎市内宿舎(2便の路線バスに分乗)大波止(端島上陸ツアー・クルーズ船)大波止(これ以降はテーマを与えての個人またはグループでの自由行動、宿舎へ自主帰館)長崎市内宿舎=午後の行動に関するプレゼンテーション、【第3日:8月22日】長崎市内宿舎(午前~解散のための再集合までは、前夜のプレゼンテーションを活用した個人またはグループでの自由行動)JR長崎駅にて13:15解散、というもので、この間の詳細は香川(2026c)で述べている。

上記の行程のうち、8月20日は一時的な豪雨により原城址が駐車場で一時停車させたバス車内からの観察となり、8月21日は強風による波浪のため軍艦島上陸クルーズが欠航したため、個人またはグループによる長崎市を中心とした自由行動に変更せざるを得なかった。自由行動においては物見遊山の観光にならないよう、当日の夕食前ミーティングで個人またはグループごとに訪問地とそこで得た学びを報告させた。

2. 対象文献の選定と文献精読、文献要旨の整理と『文献要旨集』の編集をめぐって

(1) 文献研究の対象となる文献の選定

前節(1)で説明した事前学習会は、第1回(2コマ)を4月26日(土)、第2回(2コマ)を7月5日(土)、第3回を7月27日(日)のそれぞれ正午より実施した。例年、第1回事前学習会で各受講生に担当する文献パッケージを選んでもらっているため、概ね前年度末(3月末)までに対象とする文献を選定しておく必要がある。今回は受講生が多くなることが推定されていたため、受講生総数を35名と仮定して少し多めに選定しておき、仮に受講生が想像よりも少なければ、選定基準となる文献の頁数を引き上げて対象を削減する心づもりだった。しかし、既に前節(2)で述べた通り学部と大学院を合わせて45名の受講生が登録してくれたため、3月末日時点で選定した文献はすべて精読作業の対象とした。

これまでの本授業科目の先例にならって、訪問地域をいくつかのカテゴリーに分け、すべての受講生が全カテゴリーから1編ずつの文献を精読できるように、精読担当文献のパッケージを授業担当者である筆者が予め設定した。各々の受講生は、設定されたパッケージから自身の担当するものを第1回事前学習会で選ぶ。

上述したカテゴリーは次に列挙するキーワードで検索してヒットする比較的新しい文献から選んだ。そのキーワードをアルファベット2文字からなるカテゴリー・コードとともに記すと次のようになる。つまり、Amカテ

ゴリー (5 編) : 「天草 崎津」「天草 崎津」(後者は異体字の「崎」)「天草空港」, At カテゴリー (8 編) : 「天草 観光」, Cs カテゴリー (11 編) : 「原城」「島原城」, Uz カテゴリー (10 編) : 「雲仙岳」「雲仙普賢岳」「雲仙・普賢岳」, Nf カテゴリー (7 編) : 「長崎大災害」, Ns カテゴリー (18 編) : 「長崎 斜面市街地」「長崎 斜面住宅地」, Ts カテゴリー (9 編) : 「長崎県高島」「長崎市高島」, Hs カテゴリー (8 編) : 「端島」(軍艦島の正式名称), 以上の 8 種である。これですべての受講生が訪問地域を「広く浅く」理解することができる。

また、上述したパッケージを設定するには 2 つの条件を設けた。それは負担の公平化を希求したもので、①担当文献の総頁数に可能な限り多寡を生じない、②無償ダウンロードが不可能な文献を受講生に担当させない(=こうした文献は授業担当者である筆者がすべて担当する)という条件である。上述の①と「全カテゴリーから 1 編ずつ」というのを両立させつつパッケージ設定に励むのは、かなり骨の折れる作業である。しかし、慎重にカテゴリー設定の作業を進めた結果、45 名の受講生が担当する文献精読の総頁数は 107~109 頁に収めることができた。他方、筆者が精読を担当した文献の総頁数は 341 頁にのぼった。

上述の②については、受講生が他機関所蔵文献の取り寄せに習熟することを視程に取めると、これが理想とは断言できない。しかし、同一文献を必ず 2 名以上で担当するようパッケージ設定を行っているため、②の条件がなければ附属図書館や文献提供元となる他機関(他大学の図書館等)の業務が必要以上に多忙となる事態を招かしてしまう。そこで、最近の数年間において、筆者はやむなく②の条件を設けてきた。

なお、受講生に配布したパッケージ設定の早見表は、A4 サイズで 4 枚の大きさになるため、紙幅の制約により本稿では割愛した。この早見表(表頭分割・表側分割)については、香川(2026a)の表 1 を参照いただきたい。

(2) 文献要旨の提出、および提出物が揃ってからの評価と推敲、『文献要旨集』の完成まで

受講生には担当文献の精読後に要旨とキーワードを所定量で Word 様式のワークシート上に整理してもらい、その締切期日(7 月 10 日)を第 2 回事前学習会でリマインドしたうえで、期日通りに提出してもらった。3 名が締切期日に遅れたが、その遅れも僅かだった。近年の学生たちは締切期日について遵守できる者が増えており喜ばしい限りである。もっとも、PDF 様式で提出して規程から逸脱した者は 6 名を数えた。提出された文献要旨を筆者が推敲して整える作業があるため、推敲に際して余計な作業を要する PDF 様式は避けるよう提出規程に明記していた。このような受講生には、すぐに Word 形式で再送するよう命じたが、全員がほぼ即座に対応できた。

提出された文献要旨は、最低 2 名(多いケースでは全員)の受講生の競作になっているので、読解の深さや文章構成力を相互比較することができる。つまり、すべての文献要旨は他者が作成したそれと比べることで相対化が可能である。この作業を繰り返すことで、文献要旨の整理について精度の高い相対評価ができる。

こうした評価作業と並行して、相対的に仕上りの良い文献要旨を選別し、仕上りの良さが拮抗しているときは複数の文献要旨の優れた点を取り入れて、筆者が各文献について推敲作業を進め『文献要旨集』(図 1)が完成した。この間は他の仕事が滞ってしまうほどの集中力を要する。こうして完成に至った『文献要旨集』は、現地授業の際の旅程表や連絡先をまとめた情報とともに簡易製本し、それを 7 月 27 日の第 3 回事前学習会で配布した。旅程表や連絡先を合冊にしたのは、現地で適宜参照できるよう図った工夫である。

Ⅲ. 『文献要旨集』の活用による「学びの深化」のための工夫

『文献要旨集』が完成しても、それを活用して学びを深化できなければ意味も価値もない。そこで『文献要旨集』を活用して取組む課題(本章の 1 節、図 2)を与え、それをレポートとして現地授業に持参させて提出を命じた。この提出方法は、初日の現地集合時において出欠確認をする際にも有効である。今回は初日の大部分が借上げバスでの移動であり、予め指定した座席に着座していることで出欠確認ができたこと、数名がバスのトランクルームで保管しているスーツケースの中にレポートを入れてしまっていたため、当初は集合時に回収を予定していたレポートは、第 1 日目の宿舎での夕食時に集めることとなった。



図1 『文献要旨集・現地授業のしおり』表紙
(原版の判型はA4、写真は2025年2月
の下見調査時に筆者撮影)

図2 『文献要旨集・現地授業のしおり』による
課題提出のための所定用紙(原版の判型は
A4、裏面の課題は本文参照)

1. 学びを深化させるための課題設定とその伝承の必要性

本章の冒頭で述べたレポート用紙の表面は、8つのカテゴリーごとに自身が精読した文献コード番号を記す欄に続けて、「自身が精読したもの以外の同一カテゴリーの文献で最も読んでみたい文献のコード番号を記し、なぜ当該文献を選んだのか理由や根拠を記しなさい」との欄(枠で囲った記入欄)を設けた。この欄の大きさは各カテゴリー共通であり、多くを記す必要がないことが容易に理解できるように設計した。カテゴリーごとに自身が精読していない文献の骨子を要旨集から読み取らない限り本課題はこなせない。受講生は『文献要旨集』に格納されたすべての対象文献の骨子を理解し、それをもとにして現地授業で訪れる地域・テーマへの関心を高めていくことができる。

すべての文献を精読していると膨大な時間を要する。しかし、各文献のエッセンスが凝縮された『文献要旨集』は精読ほどの時間を要さない。学部学生も大学院学生も、成績評価の厳正化が求められるようになって以降、正確な評価のために各授業科目で求められる提出課題が多くなっている。こうした環境のもとでは、手を抜かない真摯な学習態度・研究姿勢の育成を図ると同時に、タイム・パフォーマンス(時間対効果)に優れた学習方法や研究技法を授業担当者が開発しなければならない。

受講生がカテゴリーごとに記入する欄の大きさは、縦17mm・横132mmで決して大きなものではない。これがA4用紙の表面側に配置されており、用紙表面側の上部には学生番号・学年・氏名記入欄が、下部には「裏面にも記入事項があります」との旨の注意書きを目立つように添えた(図2)。

レポート用紙の裏面側には2つの問いを設けた(図は割愛)。一つ目は「文献精読を終えての率直な感想」で、二つ目は「文献精読の取組みで、改善すれば効果が上がると思われる点の提案」である。第3回事前学習会から現地授業第1日目までは3週間余の時間があるので、レポート用紙の表裏に記された課題をこなすことが大きな負担になることはないと推察される。裏面の問いは本授業科目および姉妹科目である「地理学特講」の授業改善

を図ることを目的としている。とはいえ授業担当者である筆者は2026年3月末日を以て35年間勤務した本学を定年退職で去る。そのため、ここで得られる知見は、後任の地理学専任教員の採用が実現された際、筆者から当該教員へ授業実践の成果として伝えられることになる。ただ、口承では伝達漏れが懸念される。それを未然に防ぎ、長年にわたる練磨で築き上げた伝承の技を保全することも本稿の重要な役割である。

本学は筆者の定年退職後、不幸にも全国の国立教員養成系大学・学部で唯一の「地理学専任教員を欠く大学」となる。これは決して褒められる判断ではない。むしろ無謀・愚策の極みともいえる人事政策が一日も早く是正されることを切に願いたい。これは地理学界に生きる者としての自己中心的な考え方で、ましてや斯界への利益誘導でもない。あくまで実践力に満ちた社会科や地理歴史科・公民科の教員を育成するためには、絶対に欠かせない人事政策である。

2. なぜ『文献要旨集』をもとにした課題で学びの深化を図れるのか

受講生たちは、第Ⅱ章の2節(1)項に記した8カテゴリーの文献を精読して相当な負担感を覚えていることが懸念される。しかし、今回対象とした全部の文献の要旨を合冊した『文献要旨集』は、そこに格納された各々の文献要旨が授業担当者(筆者)による徹底した推敲を経ているため、比較的読みやすく仕上がっている。従前はこの『文献要旨集』を手渡すに留めていたが、現地で受講生とディスカッションしていると、訪問地域についての理解が決して十分でない者が散見された。

そこで、受講生に対して先述した課題、すなわち図2に示した「自身が精読したもの以外の同一カテゴリーの文献で最も読んでみたい文献のコード番号を記し、なぜ当該文献を選んだのか理由や根拠を記しなさい」という課題を与えた。この課題が成績評価物の一つとなることは課題を与えた時点で告知している。この課題への取り組みが大きな負担にならないよう記述欄を敢えて大きくしていないことは既に述べたとおりである。記入スペースが限られていることは、冗長な記述を回避する効用もあり、それを読んで評価する授業担当者にとっても負担を軽くできる利点がある。

各々の受講生は、文献要旨の作成が負担の重い作業であることを熟知しているため、幅広く多くの文献のエッセンスを手短に把握できることに少なからず利便性や効率性を感じるはずである。また、課題が成績評価物になることも告げているため、手抜きをしない作業が期待できる。このような課題は現地へ持参させて1日目の夕食時に回収したが、受講生全員が漏れなく提出した。記載内容を熟読しても、かなり誠実に取り組んだ痕跡が至るところに認められ、訪問予定地に関する受講生の知識や理解がこの課題によって大幅に充実したことがわかった。

せっかくの機会なので、受講生が「各カテゴリーで最も多く精読希望者を集めた文献」を表1にまとめた。全部で8つのカテゴリーは、Am:「天草 崎津」「天草 崎津」(後者は異体字の「崎」)「天草空港」、At:「天草 観光」、Cs:「原城」「島原城」、Uz:「雲仙岳」「雲仙普賢岳」「雲仙・普賢岳」、Nf:「長崎大水害」、Ns:「長崎 斜面市街地」「長崎 斜面住宅地」、Ts:「長崎県高島」「長崎市高島」、Hs:「端島」(軍艦島の正式名称)である。これらのうち「地域や場所」を主軸にした地誌学的カテゴリーがAm, Cs, Uz, Ts, Hsの5種、「テーマや主題」を重んじた系統地理学的カテゴリーがAt, Nf, Nsの3種である。

表1をもとにして、精読を希望する受講生が最も多かった文献の書誌情報は本稿末尾の参考文献欄に列記している。ただし、本稿の研究目的や研究概略に関する記述の際に使用した文献も同一欄に掲出しているため、表1に記した文献を模索する際には著者名と発行年を用いて照合する必要がある。

受講生が提出した課題を精査すると、小学校・中学校社会科、高等学校の地理歴史科や公民科で着目度の高い事項に関する文献が多く選ばれていることがわかる。たとえば、Atカテゴリーの佐々木・田中(2023)は、エコツーリズムという用語は中等教育で扱われることが多い一方、初等教育においても「環境に優しい観光」という表現で扱われるケースがある。また、Nfカテゴリーは湿舌帯や線状降水帯に関する理科的な文献が多かったものの、精読希望者を最も多く集めたのは「災害時のごみ処理」をテーマにした文献であり、災害そのものよりも被災時の生活環境の維持に受講生の関心が高いことを物語っている。こうした傾向は、受講生の多くが初等・中等教育の教員を志す本学の特質に根差していると判断できる。他方で、純粋学術的な個別事項を深掘りしたような文献は、受講生の多くが関心を寄せている歴史的考察を多く含む文献を除いてはほとんど選ばれていない。とくに理科的な文献については「難度が高い」と感じた受講生が少なからずいたと考えられる。

表 1 各カテゴリーで最も多く精読希望を集めた文献の一覧

文献コード	著者（発行年）	希望者 1)	選択可能人数 2)	選択率（%）
Am01	東（2008）	27	45	60.0
At04	佐々木・田中（2023）	12	38	31.6
Cs04	小西（2007）	8	25	32.0
Uz01	荒木（2017）	13	45	28.9
Nf02	田中（1982）	20	45	44.4
Ns06	小澤（2009）	7	40	17.5
Ts04	香川（1993）	11	39	28.2
Hs03 3)	田中・森（2017）	12	45	26.7
Hs06 3)	野口（2022）	12	45	26.7

資料：第3回事前学習会（2025年7月27日実施）で課した宿題（図2で提示したもの）の結果より作成。

- 1) 「各カテゴリーにおいて自身が担当した文献以外のうち最も精読してみたい文献」を問いかけた。
- 2) 当該文献の精読担当者数を受講生数から減じた数値（数値が45の場合は授業担当者（香川）が精読した文献を示す）。
- 3) Hsカテゴリーでは、Hs03とHs06がともに希望者12名で首位となったため2点の文献を併記した。

（資料：図 2 課題への受講生による回答を集計）

IV. 成果共有という課題に取り組んだ受講生による評価—むすびに代えて—

1. 本研究の目的の再確認

本章では、本稿のまとめとして、一連の作業を終えた受講生から得た資料をもとに、今回の取組みに関する評価を下し、今後に一層の改善を図るための糸口を探る。上に記した一連の作業について改めて記すと、①対象文献の選別→②文献パッケージの設定→③文献パッケージの選択→④文献精読と課題「文献要旨とキーワードの提案」→⑤提出された文献要旨及びキーワードの精査と推敲作業→⑥『文献要旨集・現地授業のしおり』の作成→⑦課題「非担当文献の中からカテゴリーごとに最も読んでみたい文献の選出、および作業全体についての感想の記述と改善を要する点の指摘」となる。上記①～⑦のうち、①②⑤⑥は授業担当者である筆者がこなしたので、受講生が担当した作業は③④⑦の3つである。以上の①～⑦が、第1章に示した本稿の研究目的の一つ、すなわち「文献研究の成果共有のための方法の開示」に相当する。

上記の課題の裏面側には「こちらについては成績評価とは一切の関係がない」との説明をしたうえで、下記の1節と2節の節題の問いかけをして回答してもらった。本節では、これら2つの問いに対する回答をテキストマイニングで分析して「成果共有の試みの成否」と「さらなる改善の余地を探る」ことで、本稿の第1章に記したもう一つの研究目的を果たしたい。それはつまり「成果共有による教育効果の検証」である。

2. 「文献精読を終えての率直な感想」から探る成果共有の利点

上記の節題のもとで得た回答文のすべてを Word 様式でベタ打ちし、それをユーザーローカル社のテキストマイニング（無料版）においてワードクラウドのスコア順に表現したのが図3である。ワードクラウドにおける表現には、出現頻度順とスコア順の2種類がある。前者が単純な出現頻度の集計結果を反映するのに対して、スコア順は単語間の係り具合を考慮して導出されるため重要度が明瞭になるという特徴がある。小説家、評論家や研

究者と比較すると、学部学生の大部分は相対的に文章表現が未熟で、同じ表現の繰り返しが頻繁にみられる。そのため本研究では、出現頻度順の結果導出よりもスコア順のそれが適切であると考えた。

図3をみると、枕詞的に出現する「精読」と「文献」はさておき、名詞では「78本」がそれに次ぐ。なお、「78本」というのは、ワードクラウドの結果表示に「～」が表示されないことによる。これは「(一人当たり)7~8本」という記述がこのように表示されたものである。さらに「文章」「要約」「要旨」「要点」「論文」なども相対的に大きく表示されている。その多くは、今回の経験を肯定的にとらえた記述の中で使われている。

動詞をみると「深める」「まとめる」「読む」「感じる」「取り組む」が比較的大きく出現する。これも大多数が自身の能力の高まりを肯定的にとらえており、今回の試みが相応の成功を収めたことを示している。

他方、大きな文字で出現する形容詞に着目すると「興味深い」が最も大きく肯定的評価をうかがわせるものの、それに次ぐ大きさの文字では、肯定的な「奥深い」と否定的な「難しい(難しい)」が混在しており、今回の課題が決して楽ではなかったこともわかる。

3. 「文献精読の取組みで改善すれば効果が上がると思われる点の提案」から探る成果共有の改善の余地

上記の節題のもとで得た回答文のすべてを Word 様式でベタ打ちし、前節と同じ Web サイトによりテキストマイニングを施し、結果を表現したのが図4である。この図についても、前節と同様のスコア順で表示した。前節の場合と同様、名詞では枕詞的な「精読」「文献」が最も大きな文字で表示されているが、それに次いで「gpt」が大きく表記されている。なお、今回使用したユーザーローカル社の Web サイトではアルファベットは原則的に小文字で現れる。受講生の回答では、すべて「GPT」と大文字で表記されていた。他の相対的に大きな文字で出現する言葉は、品詞を問わず前節のそれに類似しており、なおかつ文字の大きさに差異が少ない。本節の節題に示した問い掛けに対する回答が前節のそれに比べて低調であったこともある。

しかし、改善点として強く指摘された記述としては、「AIや(チャット)GPTを使えば、要旨を書くのに大きな労力は要さないの、今回の課題自体が意味をなさないのでは…」という記述が少し目立った。その大半は「真面目に取り組んだ者が馬鹿をみる」という趣旨を含むものであったので、今後はAI活用がなされることも予想しておいた方が良いかもしれない。実際に得られた回答を精査すると、同じ文献について酷似した要旨が何組か認められたが、それがAI活用によるものなのか、禁を破っての情報交換によるものなのか、いまのところ教育研究の場でAI活用とは縁が薄い筆者には判別が困難である。

4. 結論—生成AI時代における文献研究のあり方—

従来も『文献要旨集』は作成してきたものの、それを活用して情報共有を徹底したのは今回が初めての試みであった。本章2節で述べたとおり、この試みは総じて受講生からは肯定的に受け止められ、第2日の夕食前のミーティング、そして夕食時に受講生から聴き取った回答でも、「卒論を書くときに役立つことを確信した」「今回訪問できなかった地区を含めて今回のフィールドを再訪したい」「文献精読は正直いって相当に苦しかったが、その一方で従来経験したことのない満足感や達成感が得られた」などの意見や感想が多く得られた。

従来は手間暇をかけて身につけてきた文献精読は、Chat-GPTなどのAIの発達によって転機を迎えつつある。つまり私たちは、外国語文献を含む多くの情報の概略を比較的短い時間で効率的に入手できる時代の入り口に立っている。その場所で旧態依然とした方法に拘泥するのは決して正しい言動であるとは思えない。しかし、思考の過程や定着に関わって「知っていること」「理解していること」「得た内容を咀嚼して活用できること」は、それぞれが微妙な相違を伴っている事実を忘れるべきではない。

とりわけ、教員養成系大学・学部で学ぶ学部学生や大学院学生は、近い将来に「教壇に立つ教育のプロフェッショナル」になる者が大多数である。こうした厳然たる事実と向き合うとき、学生たちを教える立場にある大学教員には、たとえば「文献研究はAIの力も借りながら、可能な限り国内外の多くの文献に触れ、AIが導出した要旨を吟味しつつ『これは!』と感じた文献を精読する二段構えの研究姿勢が望まれる」など、科学技術の進展を上手く取り込んだ柔軟な指導が求められるのかもしれない。

謝 辞

本研究の授業の予備調査段階で、訪問地となった各自治体（天草市、南島原市、島原市、長崎市）の教育委員会の皆さま、長崎県立郷土資料センターの皆さまから小学校社会科副読本の提供や資料複写等で便宜を図っていただきました。末筆ながら記して御礼申し上げます。なお、本研究の一部には、JSPS 科学研究費基金・基盤研究(C)「小学校社会科副読本を活用した地理・地理学教育の裾野拡大とボトムアップ」（課題番号：21K01044, 研究代表者：香川貴志）を使用しました。本研究の骨子は、2025年9月21日に弘前大学で開催された日本地理学会・東北地理学会の2025年秋季学術大会合同大会において発表しました。

参考文献

- 東 昇 (2008) 「文化二年「天草崩れ」と宗門改帳—肥後国天草郡崎津村文書を中心に—」『京都府立大学学術報告 人文・社会』60, pp. 69-85.
- 荒木道子 (2017) 「雲仙岳の温泉信仰—満面寺と温泉神社四面宮—」『観光学論集』12, pp. 57-66.
- 小澤知美 (2009) 「長崎の地域調査—地理学フィールドワーク—」『調査報告書 (お茶の水女子大学)』, pp. 23-31.
- 香川貴志 (1993) 「長崎県高島における閉山後の文化景観」『京都教育大学紀要A (人文・社会)』82, pp. 45-61.
- 香川貴志 (2026a) 「天草・島原・長崎を巡るための事前学習 (第1報)—天草, 原城, 島原城に関する文献研究—」『京都教育大学環境教育研究年報』34, 印刷中.
- 香川貴志 (2026b) 「天草・島原・長崎を巡るための事前学習 (第2報)—雲仙岳, 長崎, 高島, 端島 (軍艦島) に関する文献研究—」『京都教育大学環境教育研究年報』34, 印刷中.
- 香川貴志 (2026c) 「天草・島原・長崎の世界文化遺産を巡るフィールドトリップ—2025 (令和7) 年度「地理学研究」および「社会科教育実践演習-地理-」(大学院) の覚え書き—」『京都教育大学環境教育研究年報』34, 印刷中.
- 小西瑞恵 (2007) 「埋 (うず) もれた十字架—天正遣欧使節と黄金の十字架—」『大阪樟蔭女子大学学芸学部論集』44, pp. 19-33.
- 佐々木大和・田中尚人 (2023) 「天草市五和町二江地区におけるエコツーリズムの持続可能性に関する研究」『土木学会論文集 D3 (土木計画学)』78(5), pp. I_307-I_316.
- 下村 勉・須曾野仁志 (2007) 「学習成果の共有・改善・継承を重視したブレンディッド・ラーニングの実践」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』27, pp. 7-11.
- 田中俊彦・森 広大 (2017) 「端島旧島民へのインタビュー—端島炭坑の労働環境—」『地域論叢』32, pp. 55-64.
- 田中 勝 (1982) 「災害時におけるごみ処理対策—7.23 長崎大水害のケース—」『都市清掃』35(130), pp. 401-415.
- 丹生日出男・松名由香・辻 萌香・久保田善彦・鈴木栄幸 (2024) 「教職志望学生の学びを愉しむ態度と大学での学習を通じた変容に関する質的調査」『日本教育工学会研究報告集』2024(2), pp. 197-200.
- 野口貴文 (2022) 「軍艦島 (長崎県端島) 建築物群の現状と余命」『リフォーム』39(9), pp. 24-42.
- 福島耕平・下村 勉 (2016) 「小学校における学習成果の共有・交流を重視した協働学習が学級集団にもたらす効果」『コンピュータ&エデュケーション』40, pp. 55-60.
- 松名由香・辻 萌香・丹生日出男・久保田善彦・鈴木栄幸 (2024) 「教職志望学生の学びを愉しむ態度の編みなおしを目指した学習内容の共有・比較を支援するシステムの開発と実践的評価」『日本教育工学会研究報告集』2024(4), pp. 211-216.
- 渡辺理文 (2019) 「考えを説明・表現する意欲と自信—クラス全体での意味構築と学習成果の共有—」『初等理科教育』51, pp. 11-14.

参考 Web サイト

- ユーザーローカル社 (2025) 「テキストマイニング—ワードクラウド (スコア順) —」
<https://textmining.userlocal.jp/> (作業年月日: 2025年9月3日)